おはなしのくに

日本の昔話

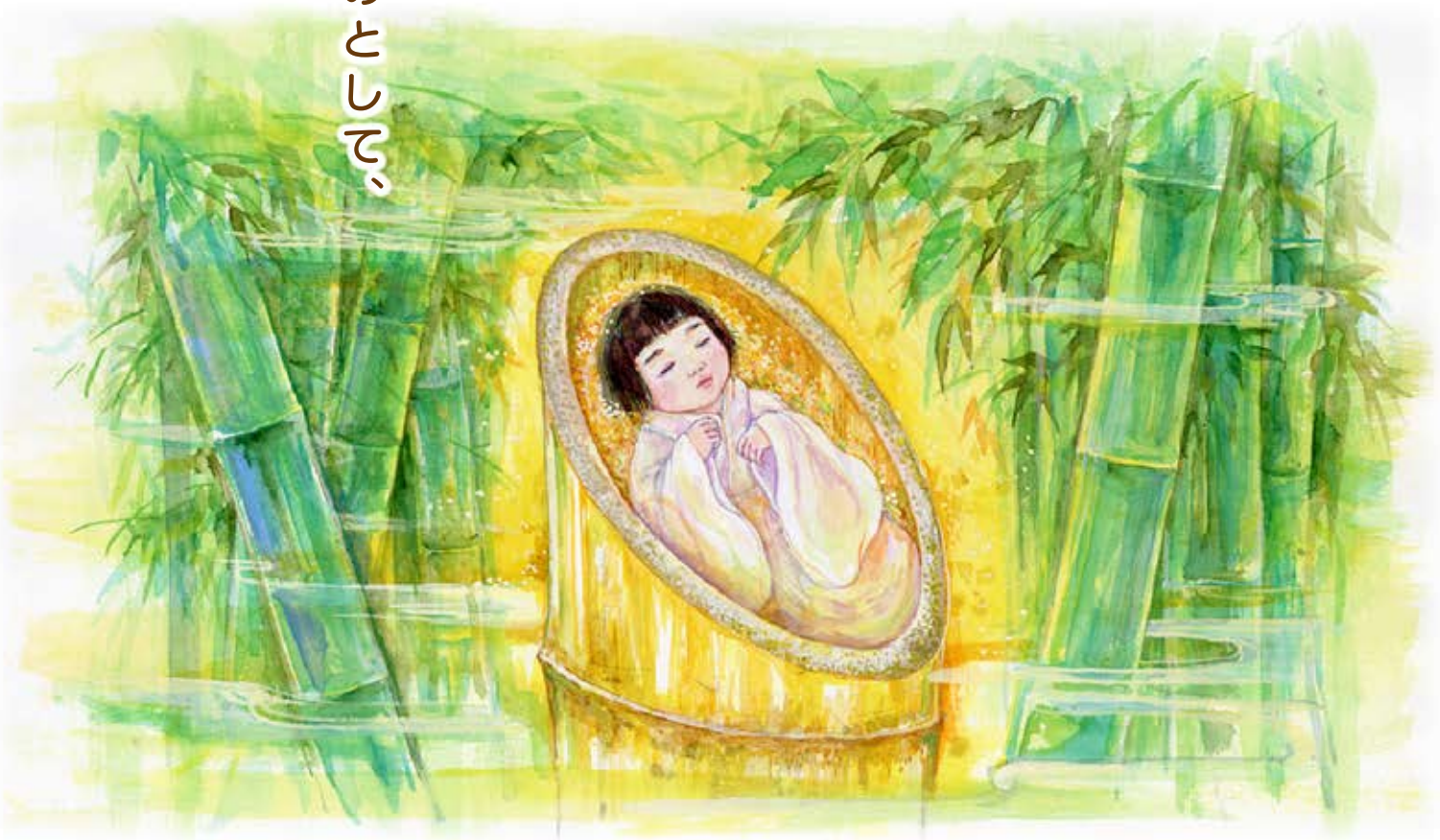
イラスト　中井 智子

いまはむかし、竹とりのおきなという
おじいさんがおりました。
ある日、おじいさんが山へ竹をとりにいくと、
竹林の中に、一本だけひかっている
竹を見つけました。

おじいさん「おや、なんじゃ？」
ふしぎにおもったおじいさんは
その竹をきってみました。
すると、どうでしょう。

小さなおんなのこがちょこんと
すわっているではありませんか。

おじいさん「こりゃ、たまげた！
なんとかわいらしい！」
おじいさんは、おんなのこをそっと
手のひらにのせてつれてかえりました。
おじいさん「ばあさんや、みてごらん」
おばあさん「おやまあ！　わたしらのむすめとして、
たいせつにそだてましょう」



おんなのこはやがて、
かがやくばかりにうつくしいむすめになり、
「かぐやひめ」となづけられました。
かぐやひめのうわさは国中（くにじゅう）にひろがり、
ひとめ見たいと、
おおぜいのおとこたちがおしかけてきました。

中でもねっしんだったのは、
みぶんの高い五人のわかものです。

わかもの１「どうかわたしのつまになってください」
わかもの２「いや、わたしのつまに！」
わかもの３「わたしとけっこんしてください」
わかもの４「いやいや、わたしと」
わかもの５
「わたしこそがあなたにふさわしい」

けれども、かぐやひめは
だれともけっこんする気はありません。
そこで五人にいいました。
かぐやひめ「わたくしがのぞむものを
もってきてくださった方のもとへまいりましょう」

かぐやひめ

「石つくりのみこさま。てんじくにある『おしゃかさまの石のはち』をもってきてください。

くらもちのみこさまは、ほうらいにある『白玉(しらたま)のみがなる金の木』を。

あべのうだいじんさまは、『火ねずみのかわでつくったころも』を。

おおとものだいなごんさまは、『りゅうのくびにある五色(ごしき)の玉(たま)』を。

そのかみのちゅなごんさまは、『つばめのこやすがい』を、おねがいいたします」

だれもみたこともきいたこともないたからものばかりでした。

石つくりのみこは、てんじくにいったふりをして、
古(ふる)いおてらにあったすすけたはちをもってきました。

石つくりのみこ
「これこそ、おしゃかさまのつかった石のはちです」

かぐやひめ
「ほんものなら光かがやいているはずです。
そのはちには、わずかなかがやきもございません」

つぎにくらもちのみこがやってきました。

くらもちのみこ「『白玉のみがなる金の木』をもってきました」

さし出されたのは、みごとな木です。

くらもちのみこ

「さあ、ひめ、わたしと

いっしょにまいりましょう」

かぐやひめがことわれずにいると、

そとからしょくにんたちの

さわぐこえがきこえてきました。

しょくにん

「くらもちのみこさま。

まだお金をいただいておりません！

おしはらいください」

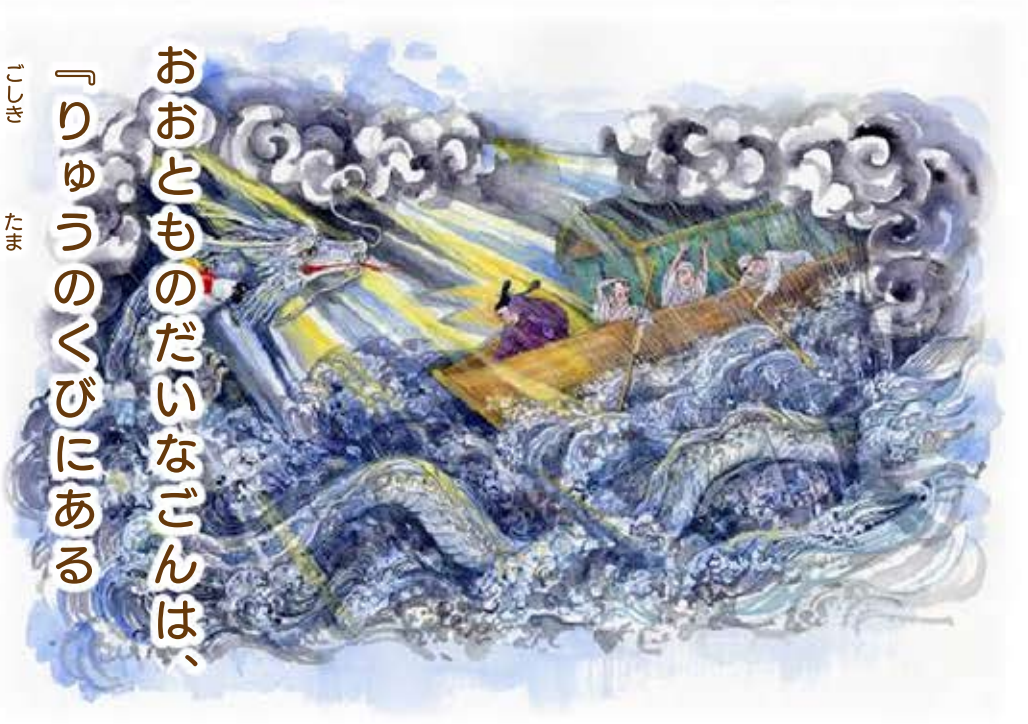
『白玉のみがなる金の木』は、

しょくにんたちにつくらせたにせものだったのです。

三人目のあべのうだいじんは、
しりあいに高(たか)いお金をはらって、
『火ねずみのかわでつくったころも』を
おくってもらいました。

あべのうだいじん
「どうです？みごとでしょう！」

かぐやひめ
「火ねずみのかわなら、
火に入れてももえないはず」
けれど、ころもは
あっというまにもえ、
はいになってしまいました。



おおとものだいなごんは、
『りゅうのくびにある
五色(ごしき)の玉(たま)』をとろうと、
ふねで出かけましたが、
ひどいあらしにまきこまれ、
いのちからがら
にげかえってきました。

いそのかみのちゅうなごんは、つばめのすがあるやしきをみつけ、そばまでのぼりました。

すると・・・。

いそのかみのちゅうなごん

「あったー！　こやすがいがあったぞ！」

ちゅうなごんがさけんだとたん！

いそのかみのちゅうなごん「あ～～～」

（ドスーン）

いそのかみのちゅうなごん「いててて・・・」

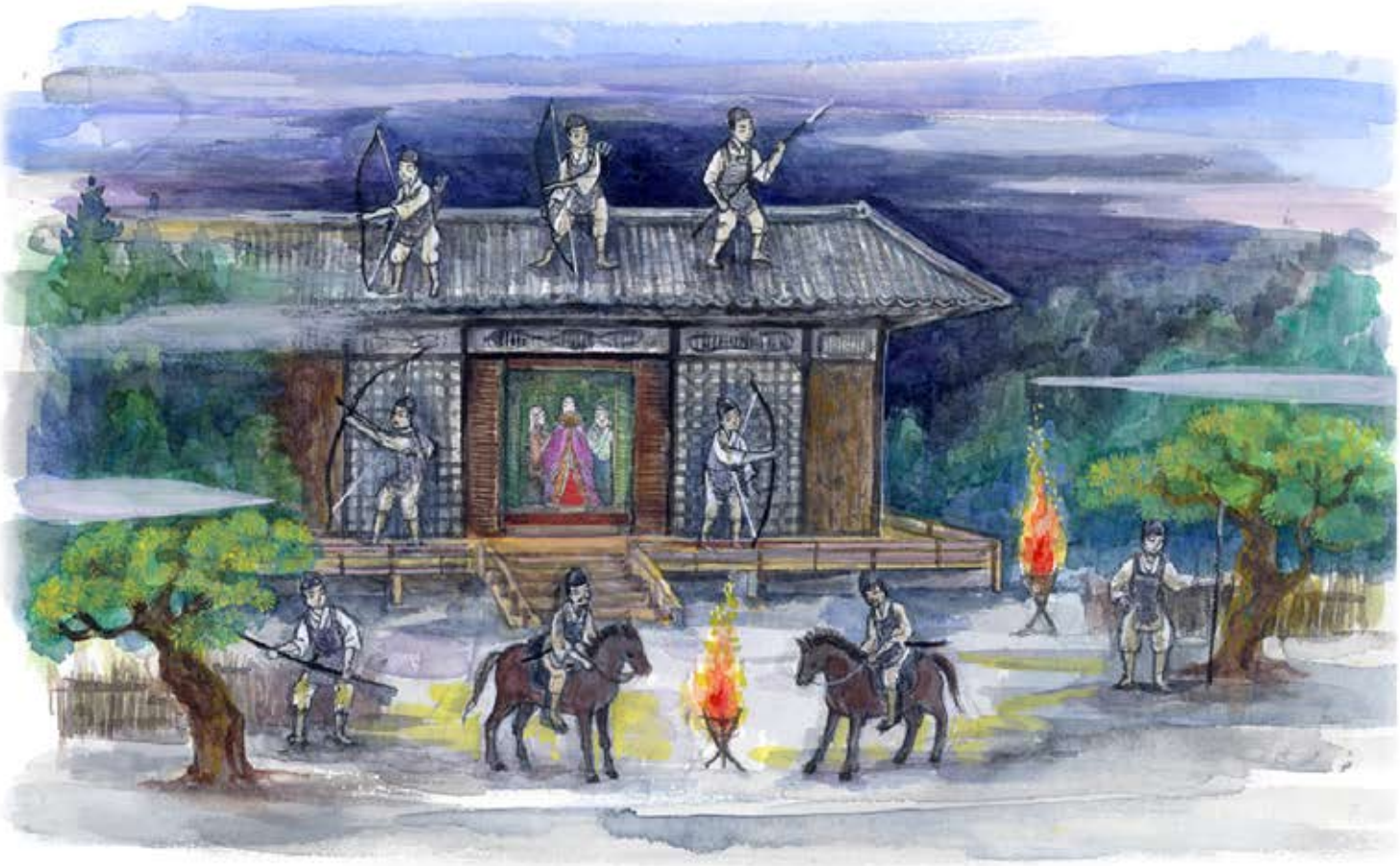
にぎっていたのは、ただのつばめのふんでした。

こうしてみな、かぐやひめとのけっこんをあきらめたのでした。

それから三年（さんねん）がすぎたころ。
かぐやひめは、月をながめながら、
おいおいとなみだぐむようになりました。

おじいさん
「ひめよ、いったい、どうしたのじゃ？」

かぐやひめ
「わたくしはにんげんのせかいにすむものではありません。月のみやこからきたのです。
つぎの十五夜（じゅうごや）のばん、
月にもどらなくてはなりません」



おじいさんは、やしきをへいしにまもってもらいました。
そして、かぐやひめをやしきのおくにかくしました。

おじいさん「これほどの人がまもってくだされば、きっとだいじょうぶじゃ」
おじいさんは、ほっとむねをなでおろしました。

とうとう、十五夜がやってきました。
ふいに、まばゆい光がさしこんで
きたかとおもうと、
月のししゃがおりてきました。
へいしたちは、みな力が入らず、
矢をはなつことができません。

やしきのとびらが
すーっとひらき、かぐやひめが
すがたをあらわしました。
月のししゃが、かぐやひめに
天のはごろもをかけようとします。
みにまとえば、このよのきおくを
うしなってしまうというはごろもです。

かぐやひめ「おまちください。
さいごのおわかれをしたいのです」

かぐやひめ「これまでそだててくださったごおんは
けっしてわすれません。
どうか、月のうつくしいよるは、わたくしのことを
おもいながら空（そら）を見上げてください」

そういうと、かぐやひめは、はごろもをまといました。

おじいさん「ひめ――！ひめ――！」

おじいさん「ひめ――！」

かぐやひめは、

空（そら）のかなたへとのぼっていきました。

おわり